

頑張り抜く

「お母さん、おもしろいもの見せようか。」

中学校生活最後の定期テストをやり終えた一週間後、学校から帰った T 君がお母さんにおもむろに見せた物、それは学年順位が掲載されている学年末テストの個人結果表だった。なんとそこには5教科順位も9教科順位も「1」の文字が。おだやかに微笑む T 君の横で、お母さんは驚きを隠せなかった。

T 君が塾に入ったのは中2の秋の終わり。お母さんは「自分で真面目にやってはいるのですが、どう頑張っても学年順位も20番そこそこで、一人でやってもこれ以上伸びないかと思ひまして。」と話された。T 君本人は物静かで口数も少なめである。入塾テストの結果の悪さに驚き、「これはまずい。」と思っているようである。途中入塾の子に対する当塾の入塾テストは、塾生も毎月受ける英語と数学の月例テストである。これは本当に実力が出る。今から2年前までの学校の定期テストならば教科書やワークを丸暗記するだけでもある程度の点数は取れていたが、この月例テストはその勉強法では歯が立たなかった。英語の文法がきちんと理解できているかどうかを計る英作や書き換え、計算力や応用力を計る数学の計算問題や方程式などの文章題、どちらも自分の理解が不十分だったことに気付かされて打ちのめされた。「やります。頑張ります。」一絞り出した声。現実を受け止め、未来を変えようという強い思いがあったわけではない。このままではいけない、やらなければ、とのあせりから出た言葉だった。

そこから T 君の大変な日々が始まった。その日の授業で進んだ内容の復習に加えて、以前の単元の理解不十分だったところの復習、間違いが直りきるまで突き返される宿題、覚えるのに慣れていないパート(単語)テスト、おまけに授業中は他の塾生同様に当てられて、新人だからといって容赦してもらえない……。苦しかった。でも、やると決めたからにはやり抜こうと思った。少しずつ理解が深まってくる実感も確かにある。彼は時間のある限りやりまくった。

努力の結果が出てきたのは中3になってからである。学年順位は一気に一桁になった。入塾当初35だった通知表も中3の1学期には42になり、2学期は44にまで上がった。そして、本当の成果はその後の本格的な受験勉強に入ってからだった。誰よりも多くの数学応用問題を解いてきたことによって、入試の難問も速く正確に解けるようになってきたのである。もう、この頃は苦しさよりも難問が解けた喜びに心が踊るようになっていた。頑張り抜いた先の境地である。確かな実力をつけ、今、彼は瑞陵高校でさらに上の自分を目指して日々頑張っている。